

タイ語母語話者による条件節「と・ば・たら・なら」の習得

スニラット ニャンジャロ-ソック

要旨

本研究はタイ語母語話者における日本語条件節習得の問題点について検討したものである。タイ語を母語とする日本語学習者 338 名に条件節の習得に関する調査を行い、調査結果を学習者の母語との対照を基にし、習得状況を分析した。調査では、条件文の文法性判断テストを行った。さらに、母語の影響を見るために、正文と判断した文についてはタイ語での解釈も求めた。

学習者の回答から「と」「ば」「たら」「なら」の使い方に対する理解が十分ではないことがわかった。これに関しては、言語転移の理論を用いて考察を行い、母語であるタイ語と目標言語である日本語の条件節を対照し、その類似点と相違点を検討した。その結果、タイ語母語話者による日本語条件節の習得過程では、タイ語からの正の転移と負の転移がどの分野で起きているかがわかった。最後に、これらの調査結果を基に母語の転移を受けてタイ語母語話者が独自に形成している中間言語モデルの提示を試みた。

【キーワード】条件節、言語習得、タイ語母語話者、母語の転移、中間言語

1. はじめに

タイ語母語話者に限らず多くの日本語学習者にとって習得が困難なものの一つに、日本語の条件節「と・ば・たら・なら」の用法がある。習得困難の一つの要因としてはその用法の多様さが考えられる。また、用法が類似していることもその要因として考えられ、どのような場合に入れ替えが可能であり、どのような場合に不可能であるかの使い分けがなかなか理解できない。例えば以下のように、「なら」と「ば」には、両者を使用することができる場合（例 1）とできない場合（例 2）とがある。

例 1 a. 田中さんが来るなら、私は帰ります。

b. 田中さんが来れば、私は帰ります。

例 2 a. 京都に行くなら、新幹線を利用してください。

*b. 京都に行けば、新幹線を利用してください。

例 1 では、a と b で意味は異なるが、「なら」と「ば」のどちらも使用することができる。例 2 では「なら」しか使用できない。ところが、タイ語を母語とする学習者には、例 2b のような誤用が多い。例 2b では、「行けば」が使え

ないのは後件に依頼文がきているからで、「ば（動作性）」にはモダリティ制約⁽¹⁾があるため、この文は非文となる。「行けば」の代わりに「行ったら」が使えるが、ここでは話し手が聞き手に「新幹線を利用してください」ということを提案したいのは「京都に行く」その前の段階になっており、「行ったら」を使うと、「京都に行ってから」という意味になってしまう。従って、例1と例2のような用法を使い分けるためには、モダリティ制約のほかに、前件と後件の関連性に注目しなければならないのではないだろうか。本研究では、この観点を扱って、タイ語母語話者による条件節の習得状況を調査することにした。

2. 先行研究

条件節「と・ば・たら・なら」に関しては、前件と後件の関連性の観点からの研究 (Alfonso1966、久野 1973)、形式間の相違に焦点をあてた研究 (Hinds and Tawa1975-6、McGloin1976-7) など、日本語学において現在まで多くの研究が行われている。一方、習得研究では、幼児の「と・ば・たら・なら」の出現順序の研究 (大久保 1967、村田 1968) など、日本語を第一言語とする研究がこれまで多くなされてきた。第二言語の習得研究としては稲葉 (1991) があげられる。この研究は、英語母語話者 45 名を対象として日本語の条件節のモダリティ制約に焦点をしぼり、その習得過程を調べたものである。その結果、日本語と英語でモダリティ制約に差異のない「ば（状態性）・たら・なら」条件節の習得は容易であるが、制約のある「と・ば（動作性）」条件節の習得は困難であること、そして、第一言語と第二言語の意味領域の異なる部分で負の転移が起こることが明らかにされた。しかし、稲葉の研究は英語母語話者のみを対象としており、この結果を他言語母語話者にどの程度応用できるかは検証されていない。また、学習者による条件節の習得過程を明らかにするためには、前節で述べたように、モダリティ制約の観点からだけではなく、条件節の前件と後件の関連性の観点からも検討する必要がある。

3. 調査の概要

3-1 調査の目的

本稿では、タイ語を母語とする日本語学習者⁽²⁾を対象に、「と」「ば」「たら」「なら」条件節が入っている文について正誤判断テストによる調査を行い、その結果を考察した。研究課題は次の三つである。

- 1) タイで日本語を学習するタイ語母語話者にとって、多岐にわたる条件節の用法のうち、どの用法の習得が容易であるか、また、どの用法の習得が困難であるか。
- 2) 「と・ば・たら・なら」は文脈によっては互換性を持つことがあるが、その使用上の制約について、学習者はどのような知識を持っているか。
- 3) 条件節の習得において、学習者の母語はどのような役割を果たしているか。

3-2 調査文の作成

本稿では、条件節の前件と後件の関連性に関する研究（Alfonso1966、久野1973）と、モダリティ制約に関する研究（稲葉 1991）とをふまえて、条件節の用法を以下の二カテゴリーに分類した。カテゴリーA-1、A-2、Bは Alfonso と久野をもとに条件節の前件と後件の関連性という観点から設定したカテゴリーであり、カテゴリーA-3は稲葉が使用した観点と同じである。

A. 前件が完了してから後件が起きることを表す

A-1 反復的事象を表す

(例) 雨期になると、農民は田植えをはじめます。

雨期になれば、農民は田植えをはじめます。

雨期になったら、農民は田植えをはじめます。

*雨期になるなら、農民は田植えをはじめます。（*印は非文を示す）

A-2 過去に生じた一回性の事実を表す

(例) 家に帰ると、日本人の友達から手紙が来ていました。

*家に帰れば、日本人の友達から手紙が来ていました。

家に帰ったら、日本人の友達から手紙が来ていました。

*家に帰るなら、日本人の友達から手紙が来ていました。

A-3 後件に命令・要求・決意を表す（モダリティ制約）

(例) *家に着くと、電話してください。

*家に着けば、電話してください。

家に着いたら、電話してください。

*家に着くなら、電話してください。

B. 後件が前件よりも先行するような関係を表す

(例) *5時の電車に乗ると、早く出かけて下さい。

*5時の電車に乗れば、早く出かけて下さい。

*5時の電車に乗ったら、早く出かけて下さい。

5時の電車に乗るなら、早く出かけて下さい。

3-3 調査の手続き

調査は、前節の二種四類のカテゴリに基づき、16の調査文を作成し、与えられた調査文が文法的に正文であるか、非文であるかの判定を○×式で求めた。また、母語の影響を見るために、正文と判断した文をタイ語で考えた場合、どのような意味であるかという解釈を記述してもらった。調査結果の分析にあたっては、正答の基準を決定するため、日本語母語話者30名にも回答してもらった。その結果から日本語母語話者間で「ゆれ」の大きい5文をはずし、回答の一致率が85%を超えた11文のみを分析の対象とした。

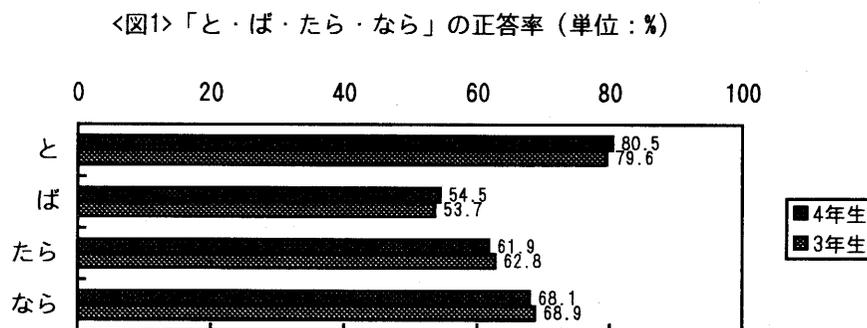
4. 調査結果

4-1 「と・ば・たら・なら」それぞれの文法形式による正答率の違い

「と」「ば」「たら」「なら」の調査文が正しいか、正しくないかを判断した結果を対象者全員の正答率の高い順に並べると、以下のようになる。

と > なら > たら > ば

各文法形式に対する正答率の内訳は図1のとおりである。



上で示したように、「と」は約80%、「なら」は約68%、「たら」は約62%、「ば」は約54%の正答率（3・4年生の平均）である。

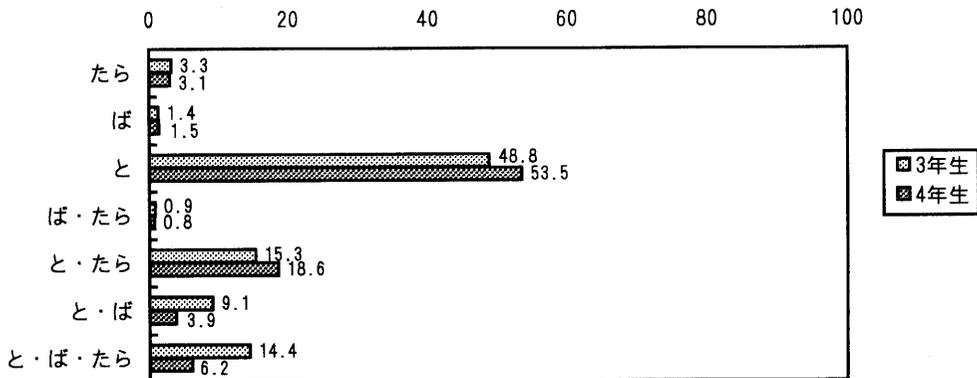
4-2 互換性に関する知識

(1) カテゴリA-1：反復的事象を表す

カテゴリA-1は前件が完了してから後件が起きる反復的事象を表す文で、「と・ば・たら」三つとも入れ替えが可能な場合である。ここに属する調査文1では、「雨期に（なる）、農民は田植えをはじめます」という文において、

「なると」「なれば」「なったら」「なるなら」の使用が可能かどうかの判定を求めた。その結果を図2に示している。学習者が正しいと判断した条件節は多い順に「と」>「と・たら」>「と・ば・たら」>「と・ば」>「たら」>「ば・たら」>「ば」である。学習者が正文と認めた率の内訳は図2のとおりである。

〈図2〉 調査文1において、「と」「ば」「たら」を正文と認めた率（単位：%）
 調査文1：雨期になると・なれば・なったら、農民は田植えをはじめます。

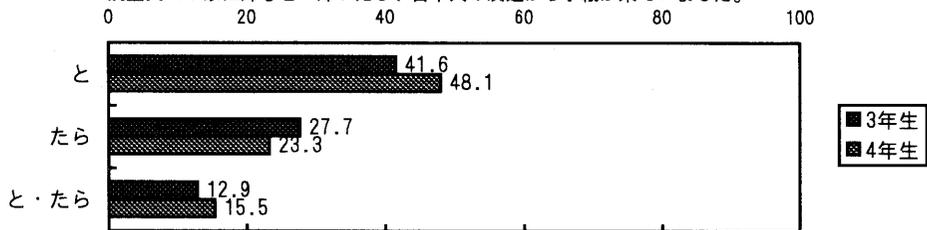


ここでは「と」のみを正文と判断するケースが一番多く見られた。以下、「と・たら」「と・ば・たら」「と・ば」はその順番に正文と認めた率が低くなる。そして「ば」「たら」に関してはほぼ正文とは判断しないという結果が観察された。

(2) カテゴリーA-2：過去に生じた一回性の事実

カテゴリーA-2 は過去に生じた一回性の事実を表す場合で、「と・たら」二つとも入れ替えが可能な場合である。調査文 11 では、「家に（帰る）、日本人の友達から手紙が来ていました」という文において、「帰ると」「帰れば」「帰ったら」「帰るなら」の使用が可能かどうかの判定を求めた。その結果を示したのが図3である。A-1の結果と同様、「と・たら」を正文と認めた学習者よりも「と」のみを正文とする学習者がかなり多いことがわかった。

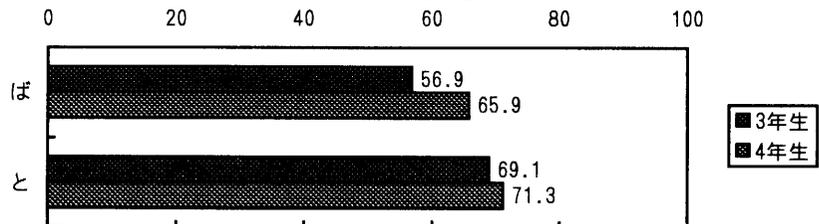
〈図3〉 調査文11において、「と」「たら」を正文と認めた率(単位:%)
 調査文11: 家に帰ると・帰ったら、日本人の友達から手紙が来ていました。



(3) カテゴリーA-3: 後件に命令・要求・決意を表す(モダリティ制約)

条件節「と」「ば」「たら」「なら」のうち、「と」「ば(動作性)」については後件にモダリティがつくと使用することができない(稲葉 1991)。ここではこのようにモダリティ制約がある場合に、「と」「ば(動作性)」を非文と判断したかどうかをみることにする。調査文 6「風邪を(ひく)、この薬を飲みなさい」と調査文 10「家に(着く)、電話してください」は、「と」「ば」が使えない文であるが、この二文に対して学習者が非文と判断した率は図 4 のとおりである。

〈図4〉 モダリティ制約文において、「と」「ば」を非文とした率(単位:%)

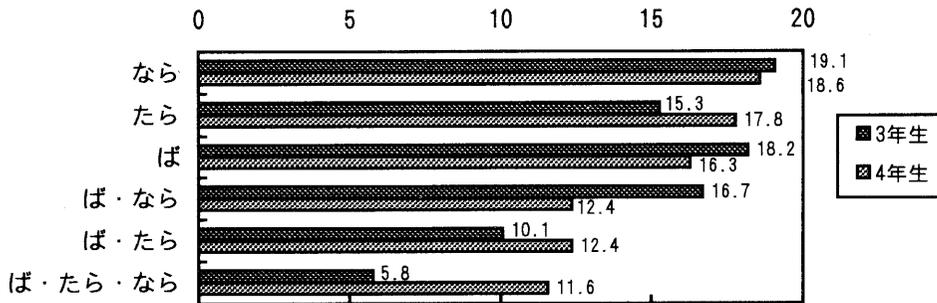


(4) カテゴリーB: 「なら」の領域での「ば」「たら」の許容

タイ語を母語とする学習者は「なら」しか使えない領域で、どのくらい「ば」「たら」を許容しているのだろうか。調査文 2「あしたプーケットに(行く)、一緒に連れて行ってください」は、「行くと」「行けば」「行ったら」「行くなら」のそれぞれが許容できるかどうかの判定を求めたものである。その結果を示したのが図 5 である。

正解である「なら」のほかに、学習者は「たら」、「ば」、「ば・なら」、「ば・たら」「ば・たら・なら」も正文と判断している。このことから、「なら」の領域に学習者の多くが「ば」「たら」を許容していることがわかる。

〈図5〉「なら」の領域で「ば」「たら」を正文とした率(単位:%)
 調査文2: あしたプールに行くなら、一緒に連れていってください。



5. 考察

5-1 調査結果の考察

今回の調査で対象者として協力してもらったタイ語母語話者は、調査の時点(98年8月)では、4年生は、3年生より日本語学習時間数が多いことから、当然習得は進んでいると考えられたが、本調査の結果に見られたように、条件節の習得については進んでいないことがわかった。すなわち、これは1年間の学習期間という差があっても条件節の習得には影響がないことを示している。

本調査においては対象者の母語が同一であるため、言語転移の理論に基づいて調査結果の考察を試みることにする。言語転移(Odlin1989)とは、母語を含む学習者がすでに習得している言語と目標言語との間での類似点や相違点が言語習得に影響を及ぼすことを指す。本調査では、母語の影響を見るために、正文と判断したところにはタイ語での解釈を記述するように求めた。調査結果を見ると、学習者はほとんど「と = phoo」「ば = thaa」「たら = thaa」「なら = thaa」と答えている。タイ語の条件を表す接続詞は、一般的に「phoo」・「thaa」の二形式が用いられ、「と・ば・たら・なら」と一対一で対応するものは存在しない。条件節の習得において学習者は、「と・ば・たら・なら」にタイ語の接続詞「phoo」・「thaa」を代用したり、その用法を適用したりして理解しようとしていることになる。そのため、前記の図1から図5までのように正の転移と負の転移が同時に起きるような結果が現れてきたのではないかとと思われる。すなわち、学習者が「と = phoo」として理解したことが「正の転移」として働き、図1のように「と」の習得が促進されたと考えられる。一方、この理解は「ば」「たら」が使えるのに、それらを使わないで「と」のみを使う(図2、図3)という簡略化(simplification)、使えないのに使ってしまう(図

1は「phoo」の領域、2、3は「thaa」の領域を表しており、日本語の「と・ば・たら・なら」とは意味領域を異にしている。「と・ば・たら・なら」の領域は前件と後件がどのような関連性を持っているかという観点で説明すると、「と」「ば」「たら」は前件が完了してから後件が起きる領域に入っており、「なら」は後件が前件よりも先行する領域に入っていることになる。

図2、図3に示したように、今回の調査で、タイ語を母語とする学習者の多くは「と・ば・たら」の入れ替えが可能な領域 A-1 (斜線部分) では、「ば」「たら」文を非文と判断している。また、図5に示したように、「なら」しか許容できないカテゴリーBに「ば・たら」を許容している。このことから、日本語とタイ語の条件節における対応関係の差異が、タイ語を母語とする学習者の日本語条件節の習得に関与していることが明らかになった。以下に、学習者がどのような独自のルール、すなわち、「と・ば・たら・なら」の中間言語を形成していると考えられるかについて、図7のようなモデルを提示したい。

＜図7＞「と・ば・たら・なら」の中間言語モデル

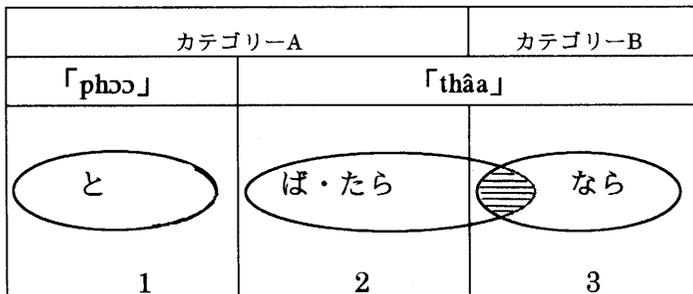


図7の中間言語モデルは次のことを示している。(i) 学習者は「ば・たら・なら」を「thaa」と対応して考えており、「なら」の領域でも「ば・たら」を使用する。(ii) しかし、日本語の2の「ば・たら」の領域では「なら」が使われることはない。(iii) 「ば・たら」の領域が「phoo」と対応する日本語の1の領域に広がることはない。これは母語の転移の影響で「ば・たら」が「thaa」の領域にしか対応しないと学習者がみなしているからであると考えられる。

6. 日本語教育への示唆

学習者が目標言語を学習するとき、母語との比較をすることは当然のことである。したがって、実際にどのようにして自分の母語に関する知識を第二言語学習に活かせばよいかを指導することは、重要な課題となる。教師は、日本語とタイ語の条件節の類似点と相違点についての対照研究に基づき、正確に説明

する必要がある。つまり、「thâa」はカテゴリ-A、B のどちらでも使用できること、これに対して、(i) 「ば・たら」はカテゴリ-B には使用できないこと、(ii) 「なら」はカテゴリ-A には使用できないこと、などを正確に説明することである。その際、図6のようなモデルを提示し、学習者の習得状況を示すことにより、それとの対照の中で、日本語の条件節がより明確に理解されることが期待できよう。学習者が母語と対応させて目標言語を学ぼうとする際、本稿で示したような日本語とタイ語の両者の対応関係のズレを指摘すると同時に、学習者の習得状況、すなわち中間言語の実態を意識させることも言語習得を促進する上で重要ではないかと思われる。それはまた、中間言語の化石化 (fossilization) を防ぐ役割も果たし得ると考えられる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、タイ語母語話者による「と・ば・たら・なら」条件節の習得状況を母語の転移の観点から明らかにした。さらに、その条件節について、タイ語母語話者が独自に形成している中間言語を説明するモデルを提示した。その上で、日本語教育への具体的な示唆にも言及した。

今回は文法性判断テストに限定したため、学習者の実際の運用能力面については見ることができなかった。今後の課題としては、条件節の運用面にも焦点をあてた研究を行う必要がある。

注

- (1) 稲葉(1991)は、前件と後件の文末形式との呼応制約を「モダリティ制約」と呼んでいる。「と・ば・たら・なら」のうち、「と・ば(動作性)」にモダリティ制約がある。つまり、「と・ば(動作性)」の後件に意志、命令、依頼など話者の聞き手に対する心的態度を表す文がきてはいけない。例えば、*ビールを飲むと、タクシーで帰って下さい。

*ビールを飲めば、タクシーで帰って下さい。

- (2) 対象者の内訳は次の表のとおりである。大学名は A=アサンブション B=カセサート C=シンラバコン D=ソクラー E=タマサート F=チェンマイ G=チュラーロンコン H=ナレスアン I=プーラーパー J=ホーカンカー K=ラーチャパットチェンマイである。

(単位：人)

大学	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計
3年生	17	6	17	12	19	10	30	12	28	47	11	209
4年生	9	3	13	0	18	10	15	17	0	36	8	129

(3) ここでは、正答率が50%以下のものを習得が困難であるものとして扱う。

謝辞

有益な助言とご指導をいただいた長友和彦先生と松田文子氏、他の皆様に心から感謝する。

参考文献

- (1) 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」 『日本語教育』 75, pp.87-99
- (2) 井上和子 (1983) 「条件を表す接続形式」 『講座現代の言語 1 日本語の基本構造』 三省堂 pp.133-151
- (3) 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- (4) 長友和彦 (1992) 「日本語の誤用分析」 『日本語教育学』 福村出版 pp.158-166
- (5) Alfonso, A. (1966) *Japanese Language Patterns: A Structural Approach*, vol.2, Tokyo: Sophia University Press.
- (6) Chamniroksarn, Dussadiiporn (1969) *Clause in the Thai Language*. Chulalongkorn University, Thailand.
- (7) Corder, S. P. (1967) The Significance of Learners' Errors. *International Review of Applied Linguistics (IRAL)* 5, pp.161-169.
- (8) Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge University Press.
- (9) Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics (IRAL)* 10, pp.209-231.
- (10) Uppakitsilapasarn, Praya (1937) 『ไทภาษาไทพจนานุกรม』 (タイ語文法) Thaiwattanapanish Press, Thailand.

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程)